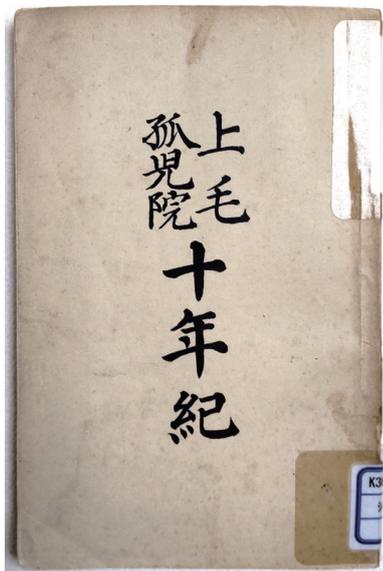


## 新収蔵資料抄

## 上毛孤児院十年紀

[上毛孤児院/編] 上毛孤児院 1902.12

63p 19cm K369.4/シ2Z 2021.12.28 受入 [頒価不明]



禁帯出 (県立図書館で閲覧できます)

## 目次

書簡	有馬四郎助君	所感を叙して上毛孤児院創立十年の佳辰を祝す	小久保次郎君
所感	後藤九十九君	上毛孤児院の十週年に	戸田常三君
上毛孤児院十年紀祝辞	吉田小四郎君	所感	杉田潮君
白百合花	速水不染君	俳句	雄美君
書簡	岡百世君	俳句	英川君
感ずる所を記す	青柳新米君	俳句	化羊君
金子君に與ふ	山本徳尚君	祝辭	ノイス君
敬愛	岡部太郎君	祝辭	シエツド君
書簡	木庭利器造君	書簡	ハメリー君
和歌	白井俊一君	創立十年紀をことほぐ	山田風外君
書簡	中山光五郎君	眞の父母を有する孤児	加藤徳重君
書簡	石井十次君	十週년을祝して	ペットレー君
書簡	柏木義圓君	所感	森川抱次君
十年紀に際しての所感	三澤富之助君	附録	
孤児院所感	矢澤島次郎君	上毛孤児院	
書簡	齋藤熊雄君	(一) 緒言	
書簡	宮前右太郎君	(二) 創立	
所感	堀貞一君	(三) 教育	
上毛孤児院十週년을祝す	濱田覺太郎君	(四) 経過	
上毛孤児院を觀るの記	田中兎毛君	(五) 現況	

## 資料概要

上毛孤児院は、1892(明治25)年に前橋市のクリスチャン、宮内文作が前橋町岩神に創立した県内初の孤児救済施設で、現在、児童養護施設・地行園などを運営している上毛愛隣社の前身にあたる。

その設立十周年を期に、関係者らの思いを綴った文に施設の沿革等の資料を加えて編まれ、1902(明治35)年12月6日に開催された創立10周年記念会で参加者に配付された冊子が本書である。

宮内文作は濃尾大震災で多くの孤児が発生したことを知り、その救済のために上毛孤児院の設立を決意したとされる。初代養育主任はやはりキリスト教徒で同志社入学を断念してまで孤児救済に情熱を傾けた金子尚雄。建物は前橋藩下級武士の茅屋が利用された。

当時は日清戦争の影響で物価高騰のさなか。個人の財産に頼っていたため孤児院の運営は困難を極めたが、資金調達のために森川抱次(県議会議員)が企画した「第一回慈善演芸会」が好成果を収めると、前橋の歌舞伎座や敷島座をはじめ県外でも演芸会を開催して資金を得た。宮内らも、幻灯機械を使う催しを県内外で行いながら孤

児院の窮状を訴え資金を募ったという。1899(明治32)年には、孤児院での出来事を大小問わず賛同者に伝え新たな賛助員を集める目的で、月報「孤児之友」(後に「上毛孤児院月報」、「上毛孤児院報」と改題)も刊行されている。

本書には、前橋教会の牧師で共愛女学校長の堀貞一、安中教会の牧師で『上毛教界月報』の主筆・柏木義円、金子尚雄が施設運営の教えを請うた岡山孤児院創立者・石井十次らが祝辞を寄せている。それぞれの社会事業や信仰に対する考えが知れるとともに、文章からは、子どもの置かれた環境や当時の社会の様子が滲み出ている。

金子は上毛孤児院を家庭、院児を家族として運営した。この「家庭」では、妻子(実子、院児)が亡くなるなどの不幸もあったが、宮内も金子も信仰を失うことなく、自らの使命と考えた孤児救済にその生涯を捧げた。

日本で社会事業という言葉が初めて使われたのは1897(明治30)年。それに先んじて行われた上毛孤児院の取組は、日本の社会事業史に打ち立てられた色あせない偉業であり、語り継がれるべき郷土の歴史である。

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料(図書資料・視聴覚資料)から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せていただけます。

なお、本紙の内容はWebにも掲載しています。ご覧の際は右のQRコードをご利用ください。また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。

